

参加者からのご質問	講師回答
PBLの設定の方法、成功の方法	基本的にgPBLは、(1)相手先大学、(2)gPBLのタイプ(派遣型gPBLか受入型gPBLか、研究型gPBLか教育型gPBLか)、(3)時期・期間、(4)プログラム内容、の設定を行います。(4)のプログラム内容は、予算と期間に大きく依存しますので、最後に設定します。 gPBLを成功に導くには、参加者に満足してもらう必要があります。グローバル環境における学びはもちろんですが、貴重な体験をしたということを実感してもらう必要があります。そのためには、英語を含め文化交流・コミュニケーションを楽しめたかどうかが重要となります。したがって、大学キャンパス内だけでなく、キャンパス外での活動や自由時間を適度に設ける必要があります。また、はじめは会話が苦手な学生もいますので、早い段階で学生同士がSNSで繋がるようにサポートしてあげることも大切です。会話は苦手でもスマートフォン上の文字であれば、コミュニケーションが得意な学生が多いです。
具体的なプログラムの設計、学生の反応等	プログラムの設計に関しては、(1)相手先大学の決定、(2)派遣型gPBLか受入型gPBLかの決定、(3)時期・期間の決定、(4)プログラム内容(研究型gPBLか教育型gPBLかの選択を含む)の決定、の順に行います。派遣型gPBLの場合は費用が大きくなりますので、それに応じて時期・期間を決定します。(4)のプログラムには、オープニングセレモニー、アイスブレイク、キャンパスツアー、ウェルカムパーティー、文化交流、小旅行、工場見学、フェアウェルパーティー、クロージングセレモニーなどが含まれることもあります。(1)～(4)が決まれば残りは比較的スムーズに行えます。ただし、補助金を申請する場合は応募要項をよく確認し、時間的余裕をもって申請書を作成する必要があります。 学生の反応に関しては、派遣型gPBL、受入型gPBLともに、ほぼ全員が満足している場合がほとんどです。その理由は、外国人の友人ができた、英語の使用を実践できた、グローバル環境での活動に自信が持てるようになった、など貴重な体験ができたというポジティブな反応が多いです。また、派遣型gPBLに参加したことがきっかけで、中長期的な留学に発展することもあります。
さくらプログラム化JASSOのための時間割設計など	ご質問内容は、補助金申請に向けたgPBLのスケジューリングのことと理解しました。補助金申請において重要なことは、どのような条件を満たさなくてはならないか、ということです。補助金の種類によって、gPBLの期間や補助金額が変わります。補助金ですべての費用が賄えるのか、あるいは、補助金は費用の一部にすぎず、残りは参加者が支払わなければならないのか、というもの大切なポイントです。gPBLを設計する場合は、たとえ補助金を得ることができなかったとしても、なんとか実施できる内容にする必要があります。そのためには、期間を何日以内になければならないかを決めます。そして、補助金が得られた場合は、どの費用をそれに充てるかを考えます。すべて補助金を使用しても補助金が余る場合は、プログラム内容をリッチにします。補助金が得られたからと言って、プログラムの期間を延ばすのはお勧めしません。これは、補助金の採択が決まる前に参加者を募集しなければならないことが多く、スケジュールの変更によって参加できなくなる人が出てくる恐れがあるからです。 補助金には、最低Working daysが設定されている場合があります。例えば、8 Working daysが必須とされている場合は、プログラムの全日程中、実際にgPBL活動を行う日数が最低8日間必要です。したがって、補助金が得られなかった場合でも参加者の費用負担を抑えるため、応募する補助金の最低Working daysをもとにgPBLをスケジューリングする必要があります。 また、補助金の使用にはプログラムの単位化が求められる場合もあります。例えば、芝浦工業大学の場合、2単位のgPBLを行う場合は47時間以上の活動が必要となります。その場合、gPBL活動が1日6時間の場合は8日間必要となり、全日程を8 Working daysとすると、派遣型gPBLで海外に行っても1日も観光ができなくなります。 このように、補助金の使用条件はgPBLのスケジューリングに大きく影響しますので、申請前にその条件をよく確認する必要があります。プログラムの日程を長くとれる場合は、休暇日を設けて自由行動の日とするのが一般的です。プログラムの日程を短くせざるを得ない場合は、文化交流や小旅行などのスケジュールを最低限にする必要があります。
PBLの定義について：受入、派遣の様々なプログラムがありますが、どの点が含まれていればPBLとする、といったような基準など（おそらく大学ごとに異なる部分もあるかとは思いますが）あれば参考までに教えていただければ幸いです。	狭義の意味でのPBLはProblem Based Learning(問題解決型学習)またはProject Based Learning(プロジェクト型学習)を指します。Problem Based Learningでは実社会における問題が与えられ、その問題を理解するための知識の習得と問題を解決するための能力を身に着けます。Project Based Learningではあるテーマが与えられ、その中に存在する”問題を発見”することで問題解決型プロジェクトを提案し、それを解決するための能力を身に着けます。したがって、”問題の発見”を行うという学習がある分だけProject Based Learningのほうが高度になりますし、一般的にはより多くの時間を費やします。どちらも少人数のグループでアクティブラーニングによって問題解決を目指す活動で、上に述べた説明がPBLの定義であると一般的に考えられています。 派遣型PBLや受入型PBLという表現は、gPBL(グローバルPBL)を行う際、海外に学生を連れていくか、海外から学生に来てもらうかというモビリティの方向を表すもので、PBL自体の定義とは関係ありません。また、研究型PBLや教育型PBLという表現も、PBLをある専門分野の研究課題として扱うか、専門分野にとらわれず一般的な社会の課題として扱うかを表すものであり、こちらもPBL自体の定義とは関係ありません。 PBLの定義とは異なりますが、一般的なPBLにおいては、(1)課題の明確化、(2)必要な知識の習得、(3)提案、(4)提案の長所・短所に関する議論、(5)提案のシステム構築や実証実験(主に理工系の場合)、(6)結論、(7)プレゼンテーション、が含まれます。 広義の意味でのPBLは、狭義の意味でのPBLを含む教育プログラムやイベントを指します。すなわち、上に述べた狭義の意味でのPBLに加え、それを実施するために必要なコミュニケーション形成のための活動や、参加するモチベーションを高めるための活動も含まれます。コミュニケーション形成のための活動としてはアイスブレイクや異文化交流イベントがあり、参加するモチベーションを高めるための活動としては見学会、小旅行、食事会などがあります。

参加者からのご質問	講師回答
とても分かりやすく大変に参考になりました。課題がある とすればどのようなことでしょうか。またその対策として はどのような方法をお考えですか。	主な課題は、(1)gPBLの価値を学生に伝えること、(2)人気のある欧米諸国への派遣型gPBLの費用を抑えること、(3)学生の英語力を向上させること、(4)gPBLを実施する教員にインセンティブを与えること、 であると考えられます。(1)への対策として、芝浦工業大学では入学直後にグローバルビジョン・ワークショップを開催しています。ここでは、海外に目を向けることへの重要性を認識してもらい、かつ、gPBLを含め大学でどのようなサポートを行っているかについて触れます。(2)への対策としては、JASSO等補助金の申請、費用の積み立て、学生寮の使用、格安航空券の利用、企業からの費用のサポート、などが考えられます。(3)への対策としては、常日頃から英語を学習・利用する環境が必要ですので、大学内での英会話教室の開講、留学生や外国人数員と気軽に話ができるグローバル・ラーニングcommonsなどの施設の整備、留学生や外国人数員による研究室(ゼミ)英会話の実施、などが挙げられます。(4)への対策としては、gPBLの計画・実施を重要な教育業績としてカウントする、gPBLを正規の授業として設置し、担当教員の他の授業負担を軽減する、などが考えられます。
こちら側にとっては、海外大学に行ってPBLを体験できる のはメリットですが、海外大学側のメリットは何になるで しょうか？	学生の視点で見ると多くのメリットがあります。新興国ではたとえ短期間であっても海外に行くことは難しいです。そのような場合、自分の大学に海外から大学生が来てグローバルな体験ができるので、とても貴重な経験だと捉えてもらえることが多いです。また、実際にgPBLで海外(日本)の学生と知り合いになると、ほとんどの学生はSNSで繋がります。海外に友人がいて、いつでも連絡が取れる環境ができることは、無形の財産となります。そこから相手先(日本)への興味が深まり、交換留学や大学院進学のために応募可能な奨学金を探すなど、グローバル活動へのきっかけにもなります。さらに、gPBLそのものを体験したことのある学生はまだまだ少数ですので、たとえ自国で行ったとしてもその価値を十分理解してもらえると思います。 また、大学の視点で見ると、自分の大学でgPBLを開催することとなり、国際交流イベントを行ったという実績を作ることになります。これは大学にとっては好都合で、大学のホームページに写真入りでgPBLを掲載してくれることが多いです。
研究をベースにした短期gPBLについては具体的かつ実践的 な内容で、大変参考になりました。ありがとうございました す。一方で、研究だけでなく、教育に関するgPBLの具体的 な内容についてもっとお伺いしたいと思いました。例え ば、どんな課題設定で、どれだけの期間のどんな活動内容 で、どんなアウトプットを想定するのか、という点の具体 例についてです。	教育型gPBLの例としては、「SDGsに向けた大学の取り組み」というようなテーマが考えられます。SDGsは専門分野や学年を問わず議論しやすい内容です。倫理的視点、技術的視点、教育的視点、大学経営的視点、社会的視点など、参加者の専門分野が多様であればあるほど、自分では考えもしなかった視点から議論が可能になります。アウトプットは大学として行うべき活動を提案することとします。ここで学習すべき内容は、根拠に基づく論理的な議論方法と説得力のある現実的な提案方法とします。参加者はいくつかのグループに分かれ、まず、SDGsの目標やそれに関する世の中の取り組みについて調べ、目標を達成するうえで何が問題となっているかを様々な視点から議論します。その際、各論点をカテゴライズし、重要性や現実性から論点を絞ります。そして、大学という立場から何をすべきか、何ができるか、提案します。次のステップは、結論を導くための検証となります。工学系であれば提案内容を実現するためのプロトタイプシステムを制作し、その有効性を評価するかもしれません。また、文科系でシステム制作が困難な場合は、提案内容が現実的であるかどうかを専門家にヒアリングして評価をするということも考えられます。いずれにしても、仮説をもとに提案を行い、検証を通して有効性や実現性を立証します。最後に、それらをまとめてプレゼンテーションを行います。これらの内容であれば、調査が1日、議論が1日、提案が1日、検証が2日、結論づけが1日、プレゼンテーションが1日、と7日間(1週間)のプログラムとして設計可能と思われます。ただし、期間に関してはどれだけの時間が必要かという観点で決めるのではなく、プログラムを何日間かけて行うことができるかという観点で決めることが重要です。期間は他の業務や費用などから決めざるを得ません。その期間内でgPBLをスケジューリングし、そのスケジュールに収まるように担当教員やTA(Teaching Assistant)などがサポートします。